

小児の下肢における正常と異常

—下肢痛との関連—

座長：亀ヶ谷 真 琴

本学会では、浜西会長が総合テーマにされた「一般整形外科医が診る子供」に沿った形として、「小児の下肢における正常と異常—下肢痛との関連—」と題し、パネルディスカッションの企画をいたしました。

小児整形外科外来には、下肢の痛みや変形を主訴として来院する例が多く見られます。しかし、その多くは、いわゆる正常発達における“normal variants”の範疇に入るものです。本パネルでは、これら“normal variants”として判断できるものと、そうでなく症候性と考えられるものを、いかに鑑別し対処するかについて、5人の現在小児整形外科の中心として活躍されている先生方に、そのポイントを示していただきました。その内容は、「下肢回旋に伴う歩容異常」「成長痛」「下肢痛で発症した白血病例」「O脚における治療の必要性」「小児の神経・筋疾患と下肢痛」で、日常よく遭遇するものから、稀ではあるが見逃してはならない疾患まで、小児の下肢痛に関連した正常と異常について述べてもらいました。

「下肢回旋に伴う歩容異常」については、佐藤整形外科医院の佐藤雅人先生に日常診療でよく見られる内旋歩行を中心に、その原因と自然経過、また注意すべき関連の疾患について述べていただきました。「成長痛」に関しては、国立小児病院以来、長期にわたる経験から日下部浩先生に発表していただきました。本疾患の特長をはじめとして、当初成長痛とされたものが、その後何らかの別の診断とされた興味ある症例も報告されました。「下肢痛で発症した白血病例」では、兵庫県立こども病院の小林大介先生にまとめていただきました。本疾患は、小児悪性疾患の中でもしばしば遭遇する疾患であり、また下肢痛などにより整形外科を初診することから、見逃してはならない疾患のひとつです。以前先生には、いくつかの小児病院で経験した整形外科初診の白血病患者をまとめていただき、国際誌に報告していただきました。「O脚における治療の必要性」は、千葉県こども病院の西須孝先生に報告していただきました。O脚は、小児整形外科領域ではよく診られる変形の一つで、ほとんどの場合生理的なものですが、中には病的なものが含まれます。その代表的なものはBlount病です。今回は、その鑑別点、装具や手術治療のエビデンスについて、過去の報告と合わせまとめてもらいました。最後に「小児の神経・筋疾患と下肢痛」ですが、これも下肢痛、歩容異常、足部変形などを主訴に整形外科を初診することの多い疾患です。今回は、小児神経科として大阪府立母子保健総合医療センター小児神経科の鈴木保宏先生にお話をいただきました。神経・筋疾患を先天性と後天性に分け、それぞれの原因、初発時期、症状、検査所見などについて、詳細に述べていただきました。